

國學院大學学術情報リポジトリ

国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化」 Displaying Religious Cultures: A Museum Perspective

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001537

国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化」 Displaying Religious Cultures: A Museum Perspective

2022年12月11日に、日本文化研究所主催の国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化」を開催したので報告する。

以下が企画の趣旨文である：

「宗教文化」について学ぼうとする際に、文字で書かれたものが重要であることはいうまでもないが、物体としてのモノや、実践としてのコトも、また欠かすことのできないものである。本国際研究フォーラムでは、こうしたモノやコトをみせる場としてのミュージアムに焦点を合わせ、その実践や可能性について考えたい。

全体を2部に分け、第Ⅰ部「大学ミュージアムの中の宗教文化」では、宗教系大学に設置されている大学ミュージアムの展示担当者に登壇をお願いし、宗教系大学という、ある意味で特定の宗教伝統と当事者的に関わっている立場から、どのような展示の試みがなされているのか、報告してもらって議論する。第Ⅱ部「多様性の中の日本の宗教文化」では、アメリカにおける日系人の宗教文化や、アイヌの宗教文化についての展示に関する報告をしてもらい、それらの豊かさについて学びながら、同時に日本で「日本の宗教文化」をみせようとする際の自明性のようなものを、少し異なる視点から照射してみたい。

第Ⅰ部・Ⅱ部を通して、必ずしも宗教実践の直接の現場ではないミュージアムにおいて、どのように宗教文化をみせることができるのか、またデジタル化やインターネットを通じた公開が進む今、モノを現実空間でみせるということに、どのような意味があり、どういった工夫をしているか、といった点など

についても議論を深めたい。

フォーラムの概要は以下の通りである：

「ミュージアムでみせる宗教文化」

- ・日時：2022年12月11日（日）13:00～17:30
- ・場所：國學院大學渋谷キャンパス120周年記念2号館1階・2101教室
- ・報告者（敬称略・発表順）と題目：

第Ⅰ部「大学ミュージアムの中の宗教文化」

- （1）深澤太郎（國學院大學博物館准教授）「来て、見て、体感する神道と日本の宗教文化」
- （2）熊谷貴史（佛教大学宗教文化ミュージアム学芸員）「展示するモノと展示するコト：仏教文化の視点から」
- （3）下園知弥（西南学院大学博物館助教・学芸員）「キリスト教展示の現状と課題：諸教会の文化をいかに展示するか？」

第Ⅱ部「多様性の中の日本の宗教文化」

- （1）エミリ・アンダーソン（全米日系人博物館学芸員）「強制収容所内の信仰と宗教：アメリカの日系人博物館を通して考える日系人の多様な宗教経験」
 - （2）北原モコットウナシ（北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授）「アイヌ文化展示が照らす日本・東アジアの宗教」
- ・コメンテーター（敬称略）

第Ⅰ部：田澤恵子（公益財団法人古代オリエンタ博物館研究部研究部長）

第Ⅱ部：高橋典史（東洋大学社会学部国際社会学学科教授）

・司会

第Ⅰ部：吉永博彰（國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所助教）

第Ⅱ部：星野靖二（國學院大學研究開発推進

機構日本文化研究所教授)

続いて、第Ⅰ部「大学ミュージアムの中の宗教文化」における各報告の要旨を掲げる：
**報告（１）深澤太郎「来て、見て、体感する
神道と日本の宗教文化」**

第１報告では、國學院大學博物館において、どのように日本の宗教文化を展示しているのか、「来る」、「見る」、「知る」、「感じる」という側面から、その活動についての発表がなされた。

まず、「来る」という観点に関連し、大学付属博物館は、社会に開かれた大学の窓口としての役割を担っていると論じた。

次に、「見る」という観点から、展示構成の工夫について言及がなされた。来館者が自由に見学できる一方で、その動線には博物館側の意図があり、全体像を示し、来館者のイメージを膨らませた上で、細かい展示を見学できるような仕掛けがなされていることが述べられた。

続いて、「知る」という観点から、モノ資料を展示する際には、なるべく本来の状態に近い設えにするために、ライティングや空間構成を工夫していることが論じられた。また、コロナ禍においては、オンラインミュージアムを作成し、来館できない人に向けたコンテンツを拡充したことも報告がなされた。

最後に、「体感する」という観点から、学生や一般、もしくは留学生などに向けたワークショップを実施することで、様々な宗教や異文化を理解する契機を創出していることにも触れられた。以上の報告を通して、大学博物館の大きな役割の１つとして、宗教リテラシーを涵養することが挙げられた。

報告（２）熊谷貴史「展示するモノと展示するコト：仏教文化の視点から」

第２報告では、佛教大学宗教文化ミュージアムにおける、仏教文化の展示に関する実践の報告がなされた。

仏教文化を「仏教に関わる人間の営み全般」

を指すと述べた上で、展示するモノについて言及がなされた。例えば、展示物には、実物の仏像や仏具類もあれば、複製や模型などのレプリカも存在する。また、そうした展示物は館蔵資料や寄託資料、借用資料など、様々な種類があり、展示にあたっては様々な制限があることにも触れられた。

そして、上記の展示物には、制作技術や工程、実際の使用方法、用途、設えなど、様々なストーリーが付随している。展示の際には、展示する「モノ」にまつわる「コト」を示すことで、観点を増やすことができると述べられた。

併せて、佛教大学宗教文化ミュージアムでは、実演や参加体験を行うことで、そうした「モノ」の背景にある「コト」を示す活動を行っていることも紹介された。

報告（３）下園知弥「キリスト教展示の現状と課題：諸教会の文化をいかに展示するか？」

第３報告では、西南学院大学博物館のキリスト教に関する展示の活動報告がなされた。

西南学院大学博物館では、諸教会や諸教派の文化を幅広く扱うことを方針としている。これは、教派を超えた交流が進み、各教派の教義や文化についての相互理解が進んでいる現状を踏まえているという。加えて、大学博物館は、学術的な立場から宗教文化に向き合うという使命を持っている。そのような使命を果たすためにも、諸教会の「モノ」を通して文化の多様性を可視化することが求められている。

一方で、諸教会の文化を扱うためには、「用語・訳語」の統一や使い分けについての検討が不可欠であり、今後の展示でどのような方針を取るべきかという議論の必要性、どの教派や教会の用語・訳語を基準とするのかという課題が提示された。

以上の３報告を受けて、田澤恵子氏からコメントを得た。

田澤氏は、信仰の対象となる「モノ」や宗教文化を「モノ」として展示する際の葛藤に

ついて触れ、宗教文化を扱う展示はセンシティブな問題であることに言及した。そして、宗教文化を展示する際は、学術的な立場から歴史の一部として扱うことが重要だと指摘した。加えて、以上のような態度が、宗教リテラシーの涵養に繋がるとコメントした。

次に、第Ⅱ部「多様性の中の日本の宗教文化」における各報告の要旨を掲げる：

報告（1）エミリ・アンダーソン「強制収容所内の信仰と宗教：アメリカの日系人博物館を通して考える日系人の多様な宗教経験」

第1報告では、アメリカの日系人に関する博物館において、宗教をどう展示するか、なぜ展示するのか、という発題があった。どう展示するかという視点からは、アメリカにおいてマイノリティの宗教である仏教などの日系人の宗教文化を理解してもらうために、教えや儀式をわかりやすく説明する必要性が説かれた。例えば、展示では一目見て興味を喚起し、もっと知りたいと思わせるような資料を選定するなどの工夫が語られた。

また、なぜ展示するかという視点からは、移民の宗教に対する偏見をなくし、共生する方法を模索するために、宗教の展示をすることの重要性が示された。一方で、キリスト教がマジョリティであるアメリカでは、説明することが難しい日本宗教である神道や新宗教（天理教、金光教など）は、展示から外される傾向があることが指摘された。

最後にコロナ禍において、博物館でのバーチャル・ツアーが行われたことも報告がなされた。

報告（2）北原モコットウナシ「アイヌ文化展示が照らす日本・東アジアの宗教」

第2報告では、展示活動を通じた研究と実践に関する活動の報告がなされた。その際に、アイヌ民族の内向きの取り組みとアイヌ民族の外向きの取り組みという2つの視点から発表があった。

上記の内容に先立って、儀礼に用いられる

道具の観点から、アイヌ民族の宗教についての説明がなされ、アイヌ民族の宗教文化の多様性や他民族の宗教文化との同質性が示された。

そして、クマの儀礼用衣装を例に、製作と展示について論及がなされた。内向きの取り組みとしては、その製作過程をも展示することで、技術の保存や文化復興を行い、外向けにはクマの儀礼の持つ意味やその分布の調査結果を提示することで、アイヌ文化の多様性を示し、外部の人びとが持つアイヌ民族や宗教文化に対するステレオタイプの解体を目指したことが報告された。

以上の2報告を受けて、高橋典史氏からコメントを得た。

高橋氏は、博物館における宗教文化の展示が、学術研究と一般社会を架橋する役割を果たしていることを指摘した。また、宗教に関連する学術研究を教育に広く結びつけ、社会に公開する博物館の社会的意義の重要性を示唆した。そして、多様性への注目が集まる現代社会において、比較の方法を用いて様々な展示が行われることは、多文化共生の観点からも意義深い取り組みだとコメントがあった。

その後、フロアに開いて質疑応答が行われ、若干時間が足りなかったものの、充実した議論がなされた。本フォーラムには延べ71名が参加した。

なお、本催事は、企画・準備から開催まで、國學院大學博物館との有機的な連携を通じて実施され、フォーラム後に、下記のように、登壇者でもある深澤太郎氏（國學院大學博物館准教授）の解説付きで、國學院大學博物館の展示見学が行われた。

○展示見学「展示担当者がミせる宗教文化」

日時：2022年12月11日（日）17：45～18：15
解説：深澤太郎氏（國學院大學博物館准教授）

この展示見学も、参加者からは非常に好評であり、フォーラムにおける議論を踏まえた上で、更に交流・意見交換が行われた。

（星野靖二）